

剣道の技術の変遷

—近代剣道の竹刀打突技術について—

前阪 茂樹*

The changing process of technical skills of Kendo

～ Shinai uchikomi geiko skills of modern Kendo ～

Shigeki MAESAKA*

Abstract

In the field of Kendo, there are two kinds of practicing methods : 1) kata geiko ; 2) shinai uchikomi geiko. Modern Kendo has been developed and established mainly by following the scheme of shinai uchikomi geiko. The practicing method of shinai uchikomi geiko was begun in Edo period. After that, the style was systematized by Shusaku Chiba, a master of Hokushin itto school, and further developed since Meiji period, whereas the original content of the skill has been partly retained. The purpose of this study is to examine the changing process of Shinai Uchikomi skill, e. g. Shikake Waza, Oji Waza, and to explain the importance of the Oji Waza in the area of modern Kendo.

KEY WORDS : 形稽古, 竹刀打込稽古, しかけ技, 応じ技

1. はじめに

剣道は元来、戦技、闘争術として誕生した技術（剣術）が、戦国時代を経て江戸時代に入り、武士道という哲学が組み込まれて成立した武道の一つである。そして、その修練方法は、形・組太刀¹⁾による稽古が中心であった。

これに対し、現在の剣道の稽古は、形²⁾による稽古と、竹刀を用いて決められた部位を打突し合う、竹刀打込稽古に分けられ、形の重要性は説かれているが、その主流は竹刀打込稽古になっているのが実態である。

この竹刀打込稽古による技の体系化は、北辰一刀流、千葉周作が考案したとされる「剣術68手³⁾」

で初めて明文化され、以降、明治・大正・昭和の時代を経て今日の剣道の技術に至っている。小林ら⁴⁾は、千葉の剣術68手は、防具を着用して積極的な打込稽古を可能にすることで、形のみでは学びにくい点を、竹刀打込稽古法で練り上げていくことの必要性を説いたとし、そのための技術体系であると指摘している。現代剣道の技は、千葉の考案した技を土台として変遷・体系化されたともいえる。

本論は、明治以降主流となってきた竹刀打込稽古による剣道の技術の変遷を考察することにより、現代剣道の技の修練、指導の一助とするものである。

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

2. 研究方法

現代剣道の技は、明治期の剣術68手等に代表される、竹刀打込の技の体系から、どのように変遷してきたものかをみるために、明治、大正、昭和初期に刊行された文献から、「剣術名人法³⁾」(高坂昌孝著, 明治17年刊)、「剣道⁵⁾」(高野佐三郎著, 大正4年刊)、「武道寶鑑⁶⁾」(講談社出版, 昭和9年10月刊)の三書を選び、その中にみられる技の体系を比較、考察する。また、現代剣道の技は全日本剣道連盟編、幼少年剣道指導要領⁷⁾によった。

3. 結果と考察

(現代剣道の技の体系)

剣道は、互いに相手の動きに応じて攻防しあう対人的な格闘技である。したがって、その指導内容として千変万化に富む対人的な攻防技能の習得が工夫されている。

全日本剣道連盟は対人的技能の内容を以下のように示している。

⁷⁾対人的技能は、剣道の技能の中核であり、「しかけていく技」(以下「しかけ技」と、「応じていく技」(以下「応じ技」)に分類される。

<しかけ技>

しかけるということは、単に積極的に打突することだけでなく、むしろ打突の前の積極的な行動すなわち「攻め」に意味がある。出ても引いても攻める気持ちを忘れてはならない。

しかけ技には次の内容が含まれる。

- 1) 攻めに対する相手の剣先の動きに応じた打突……「一本打ちの技」
- 2) 相手の構えを崩して攻めて打突する……「払い技」
- 3) 相手の注意を一方に片寄せ、隙のできた別の部位を打突する……「二・三段の技」
- 4) 相手が行動を起こそうとする端を打突する……「出ばな技」
- 5) 引いて相手の体の伸びたところを打つ……「引き技」
- 6) 一種の誘い技である……「かつぎ技」

- 7) 相手の意表をつく……「片手技」
- 8) 防御を考えず燃えるような攻撃技……「上段技」
- 9) 相手の竹刀に自分の竹刀を巻きつけるようにして打突の機会を得る……「巻き技」

<応じ技>

応じ技は、相手が攻撃してくるのに対して、すり上げ、打ち落とし、応じ返し、抜き等して、相手の打突を無効にして反撃に出る技である。応じ方と反撃の変化で色々の技が生まれる。

応じ技には次の内容が含まれる。

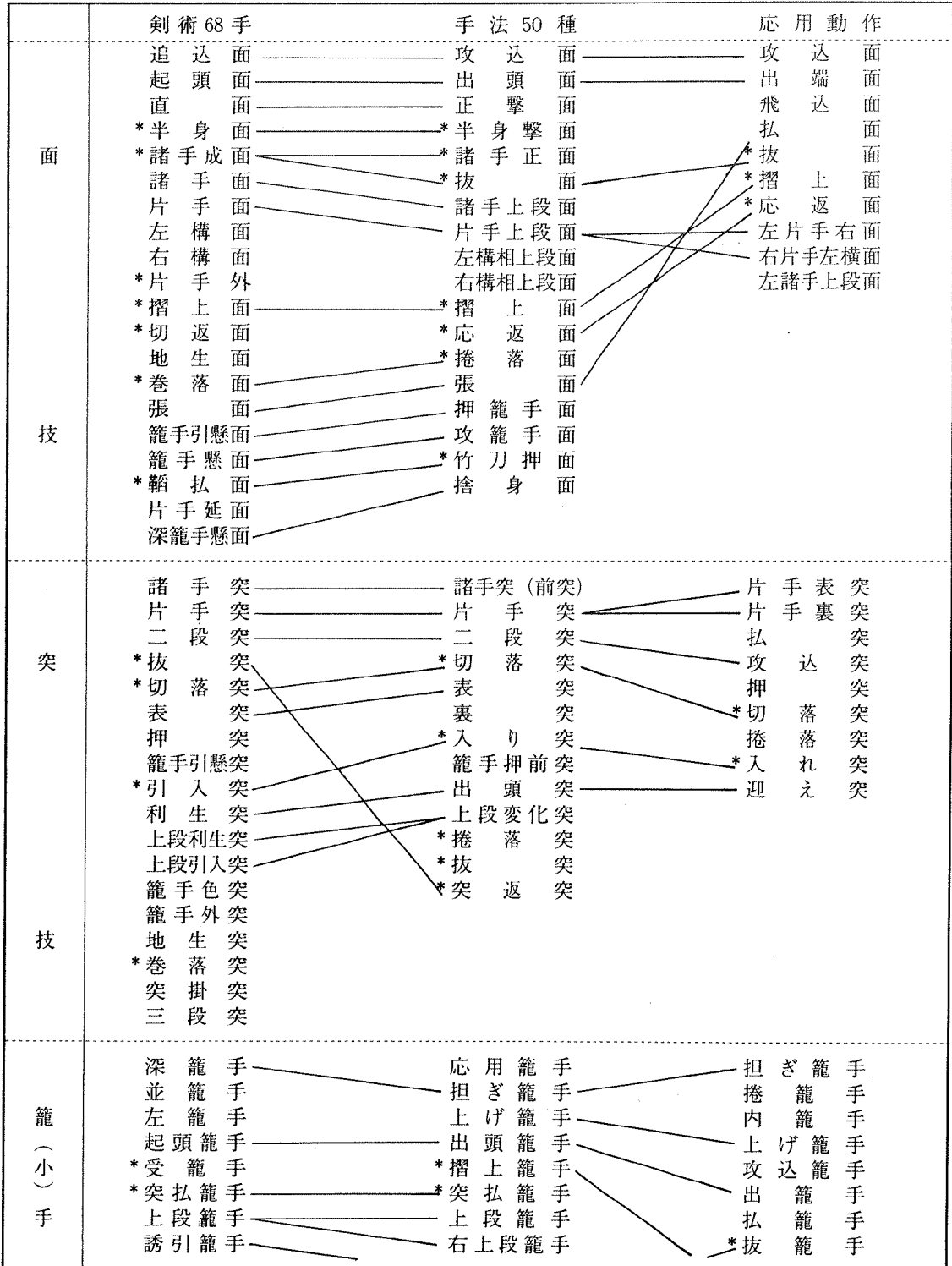
- 1) 相手が打突してくる竹刀を「すりあげ」ることにより無効にする……「すり上げ技」
- 2) 相手の打突している竹刀を体捌き、竹刀捌きにより空を打たせ、相手の体や技の尽きたところを打つ……「抜き技」
- 3) 相手の打突してくる竹刀を受け又はすりあげるように応じ、応じた反対側に竹刀を返して打つ……「返し技」
- 4) 相手の打突してくる竹刀を体の捌きとともに古流(一刀流)の「切り落とし」の如く打ち落としとして打つ……「打ち落とし技」
- 5) 相手の打ってくる竹刀を体の捌きと竹刀捌きで受け流すようにして無効にし、反撃する……「受け流し技」
- 6) 相手が攻めて打込んできた竹刀をこちらの竹刀の左側又は右側で押さえるように応じ、素早く打つ……「応じ技」

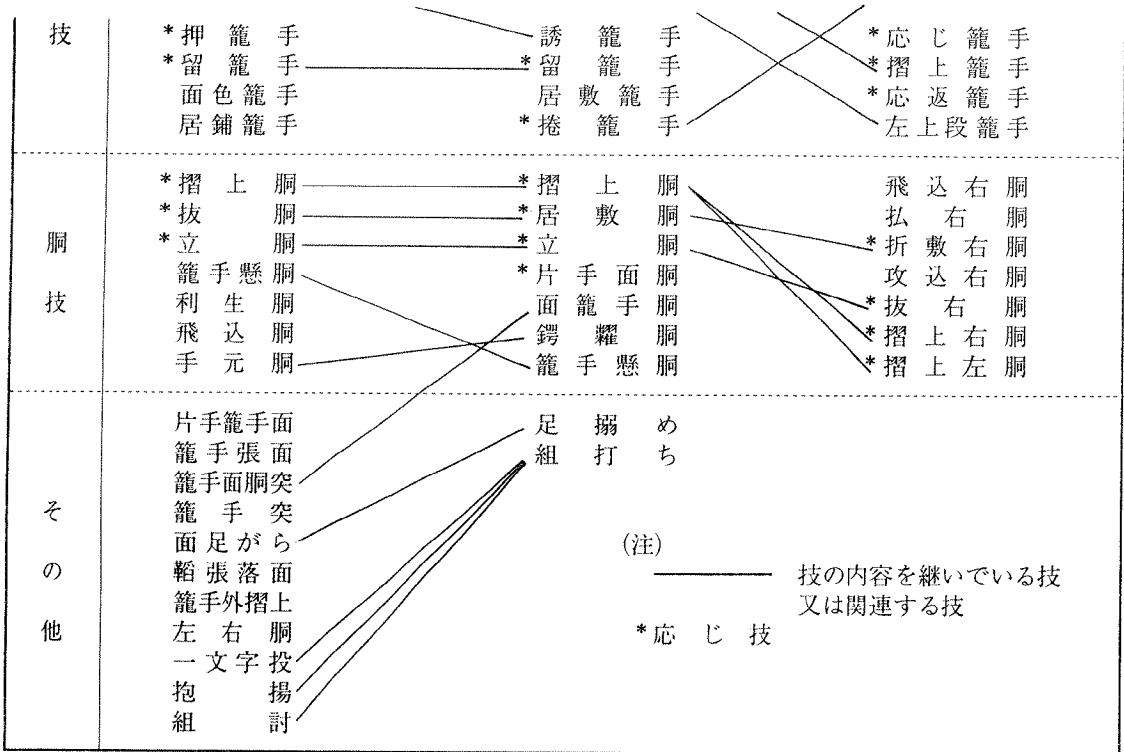
現代剣道における技の体系は、五輪書⁸⁾にみられる懸の先(しかけ技)、待の先(応じ技)に基づいて分類、細分化されているようである。これは、戦後の「しない競技」の影響を受けているとの報告⁴⁾もあり、剣道が競技として、また、技術指導の教習形態の確立を示すものと思われる。

(明治～昭和初期における技の体系)

表1は「剣術名人法」中の剣術68手、「剣道」中の手法50種、「武道寶鑑、～佐藤卯吉著、剣道の基本～」中の応用動作を比較してみたものである。

表1 近代（明治～昭和）における技術体系





現代剣道の技の分類は、その特性が対人的技能にあることから、自ら技をしかけていく「しかけ技」と、相手の攻撃に対し、その打突を無効にして反撃する「応じ技」に分類されるが、表1では打突部位別に配列されている。「剣術名人法」では「何ホド名人上手ニテモ、面、籠手、胴、コノ外ニ打ツ場所、突ク所ハ決シテナキモノナリ⁹⁾」とあり、防具を着用することで、打突部位が明確化され、各部位を如何に有効に打突するかという観念で体系づけられたものと思われ、また、それまでは各流派とも形稽古による修練が主であり、形（組太刀）には、しかけ→応じの妙技が全てに組み込まれていることより、現在のような分類は、あえて必要がなかったのではないと思われる。

<しかけ技、応じ技による分類>

表1中の技を「しかけ技」「応じ技」に分けると、以下のようになった。尚、その分類は、それぞれの技の説明に基づいた。(説明文は省略)

竹刀打突による技の体系は、剣術68手を手本として、各時代ごとに技を選択し、もしくは新たに

剣術48手	
面 技 20 中、	しかけ11, 応じ7, 他2
突 技 18 中、	しかけ12, 応じ4, 他2
小手技12中、	しかけ8, 応じ4
胴 技 7 中、	しかけ4, 応じ3
続技11	
手法50種	
面 技 18 中、	しかけ10, 応じ7, 他1
突 技 13 中、	しかけ8, 応じ5
小手技12中、	しかけ8, 応じ4
胴 技 7 中、	しかけ3, 応じ4
応用動作	
面 技 10 中、	しかけ7, 応じ3
突 技 9 中、	しかけ7, 応じ2
小手技12中、	しかけ8, 応じ4
胴 技 7 中、	しかけ3, 応じ4

つけ加えられてきた中で、技自体、精選されてきたといつてよからう。これは、全体の技数が絞ら

れてきていることから推測できる。そして、竹刀打込による技術は、自らが先を懸け、積極的に打ち込んでいく「しかけ技」主体のスタイルに変容してきたのも明らかである。剣術68手中の飛込胴、「右同構へニ守り居ルヲ、此ノ方ヨリ飛込込ミ胴ヲ打ツヲ云フ。但シ此ノ業ハ甚ダ無理ナル業ナリ¹⁰⁾」とあるが、昭和初期頃には、この甚だ無理な技が、剣道の技の中でも最も基本的、且つ大切だとされる面技（応用動作中の飛込面）に見られるようになったのは代表的な例といえる。しかし、佐藤は、この飛込面について次のような解釈をしている。

飛び込み面撃¹¹⁾

要領

- (1) 省略
- (2) 省略
- (3) 省略
- (4) 撃つべき機会の有無にか、はらず、捨身の意気で飛込む説き、相手が其の氣勢に押されて、構を崩すところを撃つことがある。

注意

- (1) 理外の理で勝を制する捨身の技である。方策尽きて施すべき技のない場合、断乎として踏み入って撃込むのである。

(2) 省略

以上からも解かるように、飛び込み技の技としての位置づけをあまり重要視していない。

応じ技の内容については、「剣術名人法」に「向フヨリ此ノ方ノ面ヘ打ち来レバ、何ホドノ達人ニテモ遁ズト云フコトハ無ク、何時モ摺揚ゲノ胴ヲ打ツカ、但シ摺揚ゲノ面ヲ打ツト云フモノカ……略……又、向フヨリ籠手ヘ打ち来レバ切落シ、突クカ又引キ外ズシ、面ヲ打ツト云フモノカ、又突キ来レバ、何時モ摺払い面ヲ打ツカ、但シハソノ鞘ヲ払い、籠手ヲ打ツト云フモノカ、右ノ三通リバカリニテモヨクヨク覚ユレバ、余リ人ニハ負ヌ者ナリ⁹⁾。」「武道寶鑑」には「応じ返しといふのは殆んど受け流し面と等しく、初心者の方打つ面ではなくして、相当出来た者が撃つ面だと信じてをります。先に対者の気合を見て、向ふから先をかけたやつを撃つので、よほど老練家のやるもの

だと思ひます。これは竹刀で受けないで、対者が先で来るのをみこして、こちらが先でやるのですから、相当修行した者でなければやれない業です¹²⁾。」とあり、応じ技の技としての重要性を説いている。また、応じ技の技数をみても、さほどの変化がないことから、技の名称に違いはあるが、「すり上げ」「抜き」「返し」「打ち（切り）落とし」「受け流し」の要素を含んだ応じであり、現代剣道は、これをほぼそのまま引き継いでいる。

これら、しかけ技、応じ技ともに、明治から昭和にかけて、精選され、絞り込まれてきたのであるが、佐藤は、「応用動作とは、基本動作に若干の変化を加へ、稽古試合に於ける諸種の場合に應ずることの出来るやうに組立てたものである。＜目的＞応用動作は基本動作を補足して技術の向上をはかるもので、相手の撃突に対し、又は相手を撃突する際に、臨機応変の動作をなし得るやうにするのが目的である¹³⁾。」として、あくまでこの68手、50手、応用動作のみに固執せず、技は相手との攻め合いの状況により無限であることを強調している。

他に、剣術68手中続業にみられる「面足がら」「一文字投」「抱揚」「組討」は、現代の試合では反則となるものであるが、稽古における身体及び闘争心の練成を目的としたものである。さらに高野は、同書の中で手法50種以外の項で、組打ちの法¹⁴⁾、足搦め¹⁵⁾を説いており、剣柔二道として「剣柔二道を全く別々のものと心得たるものあれどもこれ誤れり。この二者はたとえば蓑と笠のごとくその一つを欠けばいずれも全きを得ざるものとす¹⁶⁾」と述べ、剣道が単に競技の側面に滞らない武術であることを示していた。

以上のことから、明治～大正期（特に明治期）における剣道は、古流剣術から竹刀剣道への移行期にあり、主流は竹刀打込稽古に変わりつつありながら、前時代の武術色を多分に残し、各流派（主に一刀流）の特色を引き継いでいたことが、技の名称（地生面、突、引懸、切落等）からも理解できるのに対し、昭和期以降は、稽古法の主流が完全に竹刀打込稽古になり、剣道として統合され、古来日本の伝統文化の側面を持ちながらも、しか

け技主体の競技としての一面が、全面的に押し出されてきたのではないと思われる。

4. まとめ

近代(明治～昭和)から現代にかけての剣道を、技の体系の変遷という面から着目してきたわけであるが、これまでに得たことをまとめると次のようになる。

- 1) 現代剣道の技の体系は、しかけ技と応じ技に分類され、対人的技能として、あらゆる状況に対応した技の区分、細分化がなされている。
- 2) 現代剣道の技の体系は、指導教習形態としてほぼ確立されている。
- 3) 近代剣道は、竹刀打込技術の導入によって、垂実戦(形)の中の実戦性を追求したことで、現在の剣道の土台となった。
- 4) 竹刀打込技術の導入により、従来の応じ技(形の上での)以上に、自ら積極的に勝機を見出す、しかけ技主体の攻撃的なスタイルに変容してきた。

相手を倒すためという目的のもとに発生した戦技、格闘術に、その技術を学ぶ過程で、崇高なる精神性を極めることに最高の目的があるという考え方が加わったのが日本の武道である。つまり、武道を構成する要素には「実戦性の追求」と「精神性の追求」の二つの要素がある。先人が、生死をかけた真剣での勝負から得た術理を形として残し、さらに竹刀打込稽古によりその術理を試みることの出来る技が、武道要素の強い技であるといえ、そして、そのような技術を駆使する剣道の姿こそ、上記の二つの要素を内包したものといえる。つまり、近代の竹刀打突による技術の変遷の中でも、変わらずその内容を引き継いでいる「応じ技」を十分に使えるように修行をし、指導の工夫をすることが大切であり、今後の剣道の歩むべき方向だと考える。

一註一

- 1) 古流剣術は、各流派独自の形が存在し、江戸時代、徳川家指南役の二流派、柳生新影流では「勢法」、一

流では「組太刀」と呼んだ。

北辰一刀流兵法組太刀では、組太刀の形43本、小太刀組の形5本、相小太刀の形6本、刃引きの形11本がある。(千葉勝太郎編、千葉周作遺稿剣法秘訣全、近代剣道名著大系第二巻、同朋舎出版、1985, pp. 297 - 314, 参照)

- 2) 剣道形の成立は、明治19年「警視庁流撃剣形」、同39年「大日本武徳会剣術形」、同44年に改正中等学校令施行規則発布により、剣道指導上、流派統一の不偏的な「形」の必要性が生じ、大正元年10月、太刀形七本、小太刀三本よりなる「大日本帝国剣道形」が完成し、その後、大正6年9月に加註、昭和8年5月増補加註を経て、昭和56年12月7日「日本剣道形」として、全日本剣道連盟により制定された。
- 3) 高坂昌孝、千葉周作先生直伝剣術名人法、近代剣道名著大系第二巻、同朋舎出版、1985, pp. 34 - 42.
- 4) 小林義雄・中村民雄・長谷川弘一、剣道の技の体系と技術化について—北辰一刀流「剣術68手」の成立過程を中心として—、武道学研究、第26巻第1郷, pp. 24 - 33, 1993.
- 5) 高野佐三郎、剣道、近代剣道名著大系第三巻、同朋舎出版、1985, pp. 103 - 107.
- 6) 野間清治編、武道寶鑑、講談社、1934, pp. 122 - 139.
- 7) 全日本剣道連盟編、幼少年剣道指導要領「改訂版」、全日本剣道連盟、1986, pp. 80 - 83より一部抜粋
- 8) 宮本武蔵は、その著「五輪書」火の巻、三つの先といふ事の中で「三つの先、一つは我方より敵へかゝる先、之を懸の先といふ也。又一つは、敵より我方へかゝる時の先、是は待の先といふ。又一つは、我れもかゝり敵もかゝり合ふ時の先、體々の先といふ、是れ三つの先也。……」(前掲書(6), pp. 590 - 591)と記している。
- 9) 前掲書(3), p. 19
- 10) 前掲書(3), p. 40
- 11) 前掲書(6), pp. 124 - 125
- 12) 前掲書(6), p. 183
- 13) 前掲書(6), pp. 122 - 123
- 14) 前掲書(5), p. 102
「試合においては敵を組み敷き腕を逆に取るか、面を捻り動くを得ざらしむるか、面を捻り取るをもって勝ちとす(危険なればみだりに行なうべからず)。……中略……敵の太刀を落せるに付け込み、勝ちを得んと焦るときは見苦しき事なり。しかれども平生組打ちの練習をなす事もまた必要なり。……」
- 15) 註(4)に同じ

「ここに併せて述ぶべきは足捌^{あしはき}めの法なり。この業に達すれば強敵に対してもよくその気を奪い胆を寒からしめ得るものとす。……中略……また敵のこれを行なわんとするを察知したる時は先んじて我れより行なうべし。すべて足捌めを行なう時は敵の死腰（体の浮ける）を見て掛くべきものとす。……」

16) 註04に同じ

—その他の参考文献（註に記した以外）—

- ・ 近代剣道名著大系第一巻, pp. 338 - 343, pp. 394 - 396
- ・ 同 上 第三巻, pp. 408 - 410
- ・ 同 上 第七巻, pp. 371 - 401
- ・ 同 上 第九巻, pp. 299 - 312
- ・ 同 上 第十一巻, pp. 94 - 101
- ・ 同 上 第十二巻, pp. 169 - 173
- ・ 大坪壽, 日本剣道形稽古上の留意点, 久留米高等専門学校紀要, 第6巻第2号, 1991.
- ・ 丸橋利夫, 現代剣道の形成過程に関する一考察—剣道のスポーツ化現象変遷史を中心に—, 国際武道大学紀要, 第5号, pp. 157 - 167, 1989.